

「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業～スタートアップ支援～」
事後評価結果

大学名	法政大学	研究分野	人文学
拠点名	能楽の国際・学際的研究拠点		
学長名	田中 優子		
拠点代表者	山中 玲子		

1. 共同研究拠点の概要 ※事後評価報告書より転記

[共同研究拠点の目的]

能楽の国際・学際的研究拠点は、能楽研究所に長年にわたり蓄積されてきた豊富な能楽研究資料や人的なネットワーク等の研究資源を、国内外に開かれた共同研究によってより広汎・有効に活用し、その研究成果を効果的に社会に還元していくことを目的とする。能楽研究所は創立以来60年間にわたり、研究の基礎となる能楽資料の収集と整備・公開に努め、重要文化財指定の室町期謡本や世阿弥伝書等を含む、約4万点の蔵書群を構築するとともに、大学の枠にとらわれず国内外の大学院生・若手研究者を受け入れ、研究の機会を提供してきた。本研究所を拠点とした研究者のネットワークを基盤とし、平成14年、能楽に関する初の総合学会である能楽学会（平成24年1月31日現在会員数454名）が設立されている。

本拠点は、能楽研究所の如上の特性を最大限に活用し、国内外の研究者との共同研究によって、1) 豊富な文献資料に基づく実証研究の深化と社会への還元、2) 総合芸術としての能楽に対応した多様な視点による新たな研究の創造、3) 国際共同研究による方法論の共有と成果の発信をめざし、共同利用・共同研究拠点を形成・運営していく。

[共同研究拠点における成果及び目的の達成状況]

1) 従来からおこなっていた貴重資料のデジタル化とウェブ上の公開を推進し、世阿弥や禅竹の伝書を含む金春家旧伝文書、光悦謡本、囃子伝書等、貴重資料計1,826点（100冊揃い謡本も1点と数える）、能楽の映像として最古の部類に属する昭和初期の能楽フィルム93点等を新たにデジタル公開。金春旧伝文書デジタルアーカイブのアクセス数は5,318（平成28年2月15日時点）である。このほか、学内の展示施設や国立能楽堂展示室等での企画展示、シンポジウムや講演会、およびそれと併せたミニ展示等で、資料自体も研究成果も広く公開している。貴重資料の翻刻は「能楽資料叢書」、シンポジウム等の成果は「能楽研究叢書」として刊行。後者は電子版としてもウェブ上で公開している。平成27年度（平成28年2月2日まで）の拠点利用者数は、学内410名、学外488名、うち共同利用・共同研究者数が学内104名、学外238名で、申請時に記した平成23年度のデータ（学内276名、学外280名、うち共同利用・共同研究者数が、学内55名、学外74名）から大きく増加している。

2) 総合芸術としての能楽を新たな視点で解明するため、能役者との協同作業はもちろんのこと、能舞台の研究（建築学）、音声研究（音響工学）、装束の調査（染織学）等を、異分野の研究者との共同研究としておこなってきた。江戸時代の能舞台の復元やコンピュータを用いた謡の旋律表記法については、成果の一部を学会で発表している。また、新たに古活字の研究をしているグループ（武蔵野美術大学）や、ロボットデザインの研究グループ（大阪芸術大学・筑波大学）との協力関係も始まっている。

- 3) 英語版の能楽全書へむけての研究グループを組織し、従来の能楽研究所を中心とする外国人研究者のネットワークをさらに拡大することができた。すなわち、従来から深い関わりのあった米国の研究者に加え、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、チェコ、シンガポールの研究者と日本人研究者とで研究・執筆分野ごとにチームを作り、平成27年7月には国際研究集会で各チームの達成状況や問題点等を検討しあった。本研究プロジェクトは科学研究費補助金を申請中である。そのほか、バロックオペラ復元の第一人者の講演、コンテンポラリーダンスや京劇の研究者との共同討議、キリシタン文献の解説を通しての能楽史再検討などにより、新しい能楽研究の視点が生まれている。
- 4) デジタルアーカイブの充実と大規模な資料展示、分野横断的な研究会やシンポジウム等により、従来は能楽研究や中世文学研究、芸能史研究等の関係者にしか知られていなかった貴重な資料の存在が、言語学者、書誌学者、美術史の研究者等にも周知され、研究資源として活用されている。インドの演劇研究者からの海外研究員受け入れ希望、スイスの大学院生によるドイツの舞踊と能の所作の関連についての調査など、能楽研究と演劇学や舞踊学を繋ぐ通路を作ることができつつあると考えている。
- 5) 特に、スタートアップ支援が拠点の当初目的の達成に与えた効果については、以下の通りである。第一に、各種貴重資料のデジタル化とウェブ公開を大きく進めることができ、その結果、従来は能楽研究所とはあまり縁のなかった言語学者や美術史の研究者などにも研究資源が確実に届くようになり、分野横断的な共同研究がいくつか始まっている。第二に、専従の事務やRAを配置するための資金を確保できたことで、効果的な研究サポートや広報を行うことできたことも研究促進に大きく貢献している。第三に、スタートアップの予算を使い、たくさんの企画を3年間集中的におこなうことで、「本拠点が進もうとしている方向」を研究者コミュニティ、能楽界、一般社会にはっきりと示すことができた。予算がなければ、従来どおり地道に資料の公開と共同研究を進めていったと思うが、そうした一つ一つ積み上げていくやり方だけでなく、一気に集中的に発信することで、異分野と組んで研究領域を本気で広げていこうとしていることをアピールできた。建築学との協同による能舞台の復元はこちらで計画したものだが、数学やプロダクトデザイン、音声学等との協力関係は、スタートアップ支援による新しい試みへの反応として、思いがけなく生まれた結果である。同様に、本拠点の最も大規模な共同基盤研究として進めている「英語版能楽事典」の刊行プロジェクトや、広い範囲からの公募型共同研究も、スタートアップ支援の予算に支えられて順調に進んでいる。

2. 評価結果

(評価区分)

A：事業の目的は概ね達成された。

(評価コメント)

伝統的な総合芸術としての能楽研究の特色ある拠点として、長年に渡り蓄積されてきた貴重な学術資料の公開及び提供、さらには、これらを活用した共同研究が着実に推進されていることから、拠点としての活動は概ね順調に行われ、関連コミュニティにも貢献しているものと評価できる。

具体的には、スタートアップ支援を有効に活用することにより、国際的にも貴重な能楽分野の学術資料の提供、データベース化による資料の公開を通じて、国内外に開かれた共同研究が実施され、その研究成果を効果的に社会に還元することで、能楽研究の発展に貢献している。また、音響工学やロボティクスの分野の研究者との連携を通じて、分野横断的な共同研究による新たな研究領域の創造が期待されるとともに、国際的なネットワークが形成されつつあるなど、異分野との融合や能楽研究の国際化に寄与している。

今後は、能楽に関する豊富で貴重な資料を有する研究所を中心とした拠点の活動を展開するためにも、学内支援の充実が望まれる。加えて、異分野との連携・融合や、国内外の関連研究者とのネットワークの構築を一層推進し、研究者コミュニティへの貢献に大きく寄与することが期待される。